

若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』

頼, 怡真
九州大学基幹教育院 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/6618260>

出版情報 : 九大日文. 40, pp.24-28, 2022-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』

「レ」
頼 怡 真

日本の台湾研究が活発化したのは、早稲田大学台湾研究所が発足した二〇〇三年一〇月からと言ってもよい。それ以降も、九州大学で「台湾スタディーズ・プロジェクト」(二〇一七年一〇月)が立ち上げられている。近年の日本では台湾ブームが生じ、台湾研究も盛んとなっているが、それでは、そもそも「台湾研究」とは何なのだろうか。またその背景には何があるのか。本書、若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』(東京大学出版会、二〇二〇年二月)はこの問題を考える際の良い手がかりとなるだろう。

第二次世界大戦(一九三九―一九四五年)において、「台湾研究」とは、日本という「統治者にとつて見通しやすい状況につくりかえ」られた「可視化」のツール(四〇頁、すなわち「帝国の学知」として始まった。戦後、日本帝国が崩壊すると、「台湾研究」そのものがしばらく忘れ去られることになる。しかし、本書において「一九七〇年代の留日台湾出身学者による諸研究の出版などの刺激を受けて次第に復活を果たした」(x頁)とあるように、現在の「台湾研究」は「帝国の学知」から「相互理

解の学知」へと、その位置づけが変わっている。本書の「はじめに——「相互理解の学知」を求めて」において、「台湾研究」は「地域研究」の一領域として定義づけられている。それは「把握しようとする地域の存在の現実性(actuality)に動機付けられ、その地域の個性(individuality)を明らかにすることを目標とし、そのために用いる方法の学際性(interdisciplinarity)によって特徴付けられる学問分野である」(iii頁)。

編者である若林正丈氏(早稲田大学名誉教授/東京大学名誉教授)が本書で述べているように、「台湾」とは何か、という「台湾」を「台湾」たらしめている「台湾という来歴」(vii、三四五頁)を概観する研究書として、本書は全五部から構成されている。

第一部「日本の植民地統治が台湾社会に与えたインパクト」においては、五〇年間(一八九五―一九四五年)に渡る、日本の台湾に対する植民地支配がテーマとなっている。当時の「統治構造」(i-1)や「台湾法制」(i-2)、「台湾原住民」(i-3)、「学校教育」(i-4)、「在台日本人」(i-5)といったトピックについて、台湾の政治や法制に注目して論じられている。

次に、第二部「中国」との距離」においては、日本統治後の台湾が論じられている。戦後の台湾では、中国国民党によって中華民国が主権を持つことになる。一九四九年に北京に樹立された中華人民共和国との関係性に注目して、「中華民国憲法」(ii-1)や「台湾の境界」(ii-2)、「中華民国の国歌」(ii-3)、「国定記念日・祝祭日」(ii-4)、「分断国家の正当性」(ii-5)、「一国二制度」(ii-6)といった国家の主権をめぐる問題が取り上

げられている。

第三部「台湾の民主化以降の社会・文化」においては、一九八〇年代以降の台湾民主化が論じられている。初めての総統自由選挙（一九九六年）で、李登輝（一九三二—二〇二〇年）が台湾出身者としては初の中華民国総統に就任すると、二〇〇〇年代に陳水扁政権（二〇〇〇—二〇〇八年）が誕生し、近年では蔡英文政権（二〇一六年—現在）が発足しているように、旧国民党政権からの離脱が進んでいる。しかし、民主化後の台湾内部ではいまだに旧政権側との政治的争いがあり、民主化によって新たに生じた社会問題などもある。本書では、そういった問題として「台湾人アイデンティティ」（Ⅲ・一）や、「慰安婦問題」（Ⅲ・五）、「移行期正義」（Ⅲ・六）などがテーマとして扱われている。

第四部「台湾の学界から見た日本の台湾研究」においては、日本の台湾研究の動向について、呉密察氏（国立故宫博物院院長）と許佩賢氏（国立台湾師範大学台湾史研究所教授）による論考が収められている。第二次世界大戦後、日本社会において台湾には高い関心が持たれてきた。しかし、日本人はその関心を「必ずしも一貫して維持してきたわけではなく、そのことは「學術研究にも当てはまること」なのだという（三三四頁）。日本の外地統治の方法は植民地によって異なっており、戦後における台湾研究や朝鮮研究など旧植民地関連の研究も一様ではない。例えば、台湾においても「帝国日本」／「植民地台湾」／「統治者日本人」／「被統治者台湾」といった図式に単純化することはできず、「より多層的で、より複雑な歴史を緻密に分析するこ

と」が必要とされているという（Ⅳ・一、三三二頁）。

そして、最後の第五部「台湾研究序説のために」においては、本書の「はじめに」において言及された「地域研究」としての「台湾研究」が再びテーマとされている。地理的な範囲としての「地域」を切り出し、その地域の「個性」を探究するため、「台湾という来歴」が何たるものであるかが考察の対象となっている（Ⅴ・一、三四五—三四六頁）。

以上のように、本書では台湾の政治・文化・社会・民衆の生活などが、「台湾研究」の視座から俯瞰されていたと言ってもよい。次に、「台湾研究」から「文学」をどのように眼差すことができるかを、本書の文脈に沿って提示してみたい。台湾においては、その主権は時代によって異なっている。オランダ東インド会社時代（一六二四—一六六二年）、明鄭時代（一六六—一六八三年）、清朝統治時代（一六八三—一八九五年）、日本統治時代（一八九五—一九四五年）、中華民国主権時代（一九四五年以降）という時代の変遷とともに、台湾の「国語」と「台湾文学」、およびその「研究」にも通時的な差異が生じている。この問題を考えるために、ここでは台湾のモダンリズムを例に挙げたい。

『詩と詩論』（一九二八年九月—一九三二年二月）など、日本のシュルレアリスム運動を「横移植」（劉紀蕙「超現實的視覚翻譯：重探台灣現代詩「橫的移植」」《中外文學》第二四卷第八期、一九九六年一月）したものととして、一九三〇年代台湾におけるシュルレアリスム詩の結社「風車詩社」（一九三三年一〇月—一九三四年二月）を挙げることができよう。大橋毅彦「昭和文学の上海体験」（勉誠出版、

二〇一七年三月）が示したように、ほぼ同じ時期に上海などアジアの各地にモダニズムが拡散する現象が見られた。ここには東アジアにおけるモダニズムの「同時性」があるとと言ってもよい（波瀾剛「東アジア的同時性」の視座——1930年代モダニズム文学・文化に関する研究ノート——（『九大日文』第二四号、二〇一四年一〇月）。

一九三〇年代における「風車詩社」のシュルレアリスム運動は一年余りしか活発化せず、長い年月の間、忘れ去られていた。しかし、一九九〇年代に入つてようやく「研究」の対象とされるようになる。その背景には、次のようなものがある。

①日本統治期に日本に留学した台湾人留学生の帰国後の活躍（三〇年代）。

②日本帝国の崩壊がもたらした日本語による創作活動の抑圧（日本統治後の中華民国統治期における、日本語の使用に対する厳しい取り締まり）。

③一九七〇年代に海外に流出した台湾華僑の台湾人アイデンティティの回復（詳しくはⅢ-1参照）とそれによる台湾研究ブームの再燃。

④一九九〇年代の二二八事件の真相究明といった民主化の動きやエスニシティの政治化（Ⅲ-1）。

⑤台湾の言論を厳しく取り締まってきた白色恐怖（戒厳令）の解消（二二八事件以降の一九四七—一九八七年）。

以上のような文脈で台湾人アイデンティティが追求される

と、台湾国内外の台湾研究も再活性化することになった。それと同時にブームとなったのは、日本統治期に日本語での創作が行われた台湾文学であった。二〇一五年にドキュメンタリー映画『日曜日式散步者 Le Moulin』（黄亞歷監督、台湾が制作され、二〇一六年には、その作品と風車詩社に関する論文を収録した『日曜日式散步者——風車詩社及其時代』（I、II、行人文化実験室、二〇一六年九月）が出版されている。

また、ここでもう一つ重要な点として、植民地支配における統治側の眼差しの問題を挙げることができよう。特に台湾など南国への異国情緒がそこにはあり、その眼差しの痕跡は植民地支配における都市計画などにも投影されている。本書においては、「日本人の「風景へのまなざし」は都市部と郊外の植物の構成をも変化」させたとし、「樹種の選択の背後には、西洋文明に対する姿勢、南国への憧れ、母国へのノスタルジア、そして居住者としての誇りなど、複数のコンテクストが交錯した」とある（I-5、六九—七〇頁）。本書では、日本内地の四季を感じさせる楓や桜、台湾特有の樹形の整ったクスノキや大王椰子の植樹などが挙げられている（七〇頁）。このような日本人による眼差しのフィルターをとおしてみた植民地の景観は、島崎藤村（二八七—一九四三年）の抒情詩「椰子の實」（『落梅集』、春陽堂、一九〇一年八月）に見られるようなエキゾティシズムと重なり合う。周知のように、この抒情詩のモチーフとなったのは、柳田國男（二八七—一九六二年）が一九八八年に恋路ヶ浜の伊良湖に滞在した際、海辺に漂着した椰子に抱いた、故郷への想念及び

異国情緒の幻想であつた。藤村の「椰子の實」においては、「名も知れぬ遠き島」や「故郷の岸」「流離の憂い」「激り落つ異郷の涙」（『落梅集』七四―七五頁）とあるが、この詩における「椰子」という言葉は、郷愁の思いを刺激するものであると同時に、南国の象徴の一つとしても機能している。

同時代的に、この「椰子」の場合と同様に異国情緒を投影する対象となつたのが、台湾の街頭によく見られる檳榔樹であつた。また、前述した「風車詩社」の同人の一人であつた楊熾昌（一九〇八―一九九四年）は『台南新報』（一九二一年五月―一九三七年一月）に「檳榔子の音楽——ナタ豆を喰ふボエテツカ」（ペンネーム水蔭萍、一九三四年二月一七日／三月六日付）を寄稿している。この詩は、同時代の日本の文壇においてシュルレアリスム運動を牽引した西脇順三郎（一八九四―一九八二年）の詩作の模倣となつている。この詩に登場する「檳榔子」というキーワードは、異国情緒のメタファーとして機能すると同時に、同時代の台湾の異国情緒を生成する装置となつていゝと言つてもよい。

以上のように、ここでは本書が提示した「台湾研究」という「地域研究」の視座から「台湾文学」を読解する可能性を吟味してきた。「台湾研究」がその考察の対象とした社会や政治、歴史といった複合的な視座から、その「文学」もまた論じられよう。

最後に、本書の目次を掲載しておく。

はじめに——「相互理解の学知」を求めて

I 日本の植民地統治が台湾社会に与えたインパクト

- 1 統治構造——清朝から台湾総督府へ、国家・社会関係の転換 新田龍希
- 2 台湾法制——同化と差別の根底にあつたもの 浅野豊美
- 3 近代国家による可視化と台湾、台湾原住民 松岡 格
- 4 学校教育 駒込 武
- 5 在台日本人——日本帝国下の人口移動と文化変容 顔 杳如
- 6 ジェンダー・階層・家族 洪 郁如
- 7 「平穩」な籠の中で歌う——流行歌に投影された台湾の戦前・戦後 陳 培豊
- 8 日常生活史 陳 文松
- 9 台湾ジャーナリズムにとつての帝国経験 谷川 舜
- 10 脱植民地化の代行——台湾の日本認識に焦点をあてて 森田健嗣

II 「中国」との距離

- 1 中華民国憲法 吉見 崇
- 2 国籍と戸籍から見る中華民国台湾の境界 鶴園裕基
- 3 中華民国の国歌 三澤真美恵
- 4 国定記念日・祝祭日 周 俊宇
- 5 分断国家の正統性 家永真幸
- 6 一国二制度 倉田 徹
- 7 台湾と中国の経済関係 佐藤幸人

Ⅲ 台湾の民主化以降の社会・文化

- 1 台湾人アイデンティティ 何 義麟
- 2 多文化主義 田上智宜
- 3 台湾語映画 魏 逸瑩
- 4 まちづくり（社区营造）の担い手のゆくえ 星 純子
- 5 慰安婦問題 劉 夏如
- 6 移行期正義 平井 新
- 7 台湾の政党政治と保守政党 林 成蔚

Ⅳ 台湾の学界から見た日本の台湾研究

- 1 「台湾史」と「日本史」の交差 呉 密察
- 2 台湾における「若林台湾学」の受容 許 佩賢

Ⅴ 台湾研究序説のために

- 1 「台湾という来歴」を求めて——方法的「帝国」主義試論
若林正丈

（二〇二〇年二月 東京大学出版会 三九〇〇円＋税）
（九州大学基幹教育院非常勤講師）